第 55 号
(年４回発行)
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

二〇一三(平成25)年度 学位記授与式が挙行される

去る、３月20日(木)に２０１３(平成25)年度の学位記授与式が本学体育館にて挙行されました。文学部第40回、社会福祉学部第12回、看護学部第６回、大学院社会福祉学研究科修士課程第10回、文学研究科修士課程第８回、総勢１７５名が所定の学業を卒業並びに修了し、学舎を巣立っていきました。一人一人晴れやかな笑顔で吉岡学長より証書を頂き、木漏れ日の中、社会人への一歩を踏み出しました。天気もみんなを祝福しているかのようでした。卒業生・修了生の皆様の前途に神様の導きと祝福が豊かにありますようにお祈り申し上げます。ご卒業・修了、本当におめでとうございます。

理事長賞授与

二〇一三(平成25)年度 卒業式式辞

学長　吉岡　利忠

２０１４(平成26)年３月20日(木曜日、午前10時開始)、弘前学院大学２０１３(平成25)年度の文学部40回生、社会福祉学部12回生、看護学部６回生ならびに大学院社会福祉学研究科修士課程10回生、大学院文学部修士課程８回生の学位記授与式における式辞を述べます。

社会に飛び立つ皆さま、現に社会で活躍している皆さま、また大学院などに進学する皆さまに、健康についてお話ししたいと思います。今さら健康についてとは、少々聞き飽きているかも知れません。しかし、いつの時代にも人々は健康を願ってきました。健康が何より一番、健康であればこそ勉学、社会における活動などに実が入るものです。身体面だけではなく精神面も含めた健康、特にこころの健康づくり、これに注目したいと思います。近年の私たちを取り巻く環境は激変し極めて複雑になりました。その中で心身の健康をいかに維持しかつ増進していくか大きな問題となっています。人間関係の複雑化、量とともに高い仕事の要求水準、ＩＴ化およびそれに伴う情報量の増大、能力優先、そしてその評価など、これまで私たちが経験したことのない環境に曝されることになるのです。いままでは職場にあっても教育現場においても大家族的でありましたが、現代では小家族化、核家族化、少子化、高齢化など、言ってみれば小さな集団の中で活動するようになってきました。職場は学校生活を終えた人たちがその後の人生を過ごすもっとも長い生活期間となります。職場では働くことによって自分を含めた家族の安定した生活の基盤をもたらすこと、職場での役割の充実感、職場における複雑な人間関係に社会人として適応していくことなど、これから皆さんにはさまざまなことが待っています。職場で良い仕事をして成果を出すためには、やはり身体的に健康であるとともに精神的にも健康でなければなりません。そこには多種多様な環境因子が存在します。物理的な因子では温度、湿度、換気、騒音、汚染など、勤務体制、労働条件、上司・同僚・部下との人間関係などは内部的な因子でしょう、それらに適応していかなければなりません。適応できない時、いわゆる職場不適合といいますが、頭痛、めまい、耳鳴り、不眠、全身倦怠感などに続き、うつ病、ストレス関連疾患など、近年にことに20～30歳代の若者増加傾向にあります。残念なことに短期間で職場を辞めてしまうことも聞きます。大学から職場へ、まったく違う環境に曝されることによるストレス、それがメンタルヘルスという新しい概念を生み出す結果になりました。メンタル：精神面、ヘルス：健康、専門的用語では、精神保健、といいますがその重要性はますます高くなってきています。

これまでネガティブなことばかりをお話ししてきましたが、ここからはこのような急激な環境変化、職場不適合、環境不適合などにたいして適切に対応する、皆さまの健康プランについてお話しします。健康づくりのめざすもの、まずは運動することです。運動は身体活動の中に含まれます。毎日の生活の中で、労働、家事、通学、趣味、歩行、掃除などの生活活動も身体活動に含まれます。運動で中等度以上は速歩、ジョギング、テニス、水泳などで低強度としてはストレッチ、ヨガなどでしょう。例えば近所付き合いからジョギングを始めたところ体調がよくなったとか、階段をよく利用するとか、一日に一万歩を歩くとか、生活習慣を見直す、すなわち行動を変えるとによって爽快感や充実感を実感できストレス社会に対応できるようになります。生活活動の中でも日常の立ち居振る舞いを少し強めにすることでも効果的でしょう。

次に食事すなわち栄養です。健康づくりには質の良いものをバランスよく適量とるという食生活を実現することでしょう。これがなかなかできない。食に関する情報は身の回りにあふれており、最近のもっともらしい学説から、俗説、風説もさることながら、多くの健康食品、サプリメント類が興味をそそる宣伝とともに出回っています。健康に良いらしいとしてこれらのものだけをとっていると必ず病気になります。食事を楽しむこと、朝食からいきいきした一日が始まり、主食、主菜、副菜を基本にしてバランス良い内容で、かつ、野菜や果物でビタミン、ミネラル、食物線維を、乳製品でカルシウムをとり、かつ食塩や脂肪分を控えめにすることで、最終的には日ごろのストレスを解消できるようになります。また、地産地消を考え、食文化、自然の恵や四季の変化を楽しみ、食材に関する知識や料理技術を身につけるなどということも、ストレス社会に対処する素敵な方法でしょう。食の次には休養です。これには良質の睡眠も含まれます。私たちはこれまで「働くことは美徳であり、休むことは不徳の至り」という意識があったように思います。実際、先人たちはそれを気合として休みも取らずに懸命に働いてきました。休みを取らないことが慣れっこになり、結局は無理に無理を重ね疲労してしまい、今でいう慢性疲労そして過労状態になり、かえって家族や職場に迷惑をかけてしまうことになります。重症の時にはもはや仕事に戻れなくなってしまいます。疲労回復には休養と睡眠です。これらの質が落ちると社会とのつながりや集中力・判断力が落ち、なんとガン、脳卒中、糖尿病の発症のリスクが高まるという科学的データもあります。昔の話しになりますが、私の先輩でスポーツ医学を専門としている大館市出身の小野三嗣先生は、昭和39年の東京オリンピックの重量挙げやレスリングチームの医科学コーチに就任されました。レスリングは日本のお家芸。重量挙げに至ってはヨーロッパや昔の共産圏の選手が強くなりなかなかメダルを取れませんでした。彼らの日夜に亘る物凄い練習を見て、これでは、、、と思ったそうです。そこで強化合宿中、一日に僅かな時間の基本的なトレーニングだけを行い、残りは休養しなさいと、休みなさいと、そのようなメニューを作成しました。彼らはこんなルーズな練習メニューでは選手自身の気持ちが萎えてしまう、相手に負けてしまう、と言いなかなか言うことを聞かなかったそうです。しかし、小野先生は強化練習の期間、選手とともに寝泊まりし、午後の休養時間には運動生理学やスポーツ医学、そして休養や栄養の科学などの勉強を一緒にしたそうです。もちろん、イメージトレーニングも取り入れ精神的な面の向上にも力を入れたそうです。なんと、東京オリンピックではいくつものメダルを獲得しました。やはり、適切な休養は、これまで練習で得られたスキルを十分発揮できるし、ここぞという時に、精神面でもアップするものです。

以上、皆さんが全く異なる環境に曝された時にはさまざまな問題が生じます。それらに対して、運動、食(栄養)、休養、ということを中心にしてお話しいたしました。

さて、学校法人弘前学院は創立１２８年目に入ります。歴史と伝統のある大学に在学したことに、堂々たるプライドを持って欲しいと思います。数年後には１３０周年記念を迎えます。皆さまとともにお祝いしたいと思います。

最後になりましたが、将来、皆さんが素晴らしい伴侶を得て、行く行くは皆さんのお子様たちが弘前学院聖愛中学校・高等学校そして母校となる弘前学院大学を目指していただき、弘前学院の歴史を共に作っていただきたいものです。皆さんに愛される大学になるように私ども教職員は一丸となって教育環境、研究環境、運営環境を改善すべく前進したいと思います。以上、皆さんの前途を祝し、私の式辞といたします。

本多庸一とキリスト教(27)

学校法人弘前学院
理事長　阿保　邦弘

日露戦争への対応（二）

本多は一九〇四(明治三十七)年『征露論』という小冊子を発行した。それによると、まず日露の平和が敗れ戦争が既に開始された以上「最早冷淡なる理論をもって戦争を論ずるの時機にあらざるなり。宜しく現在の戦争においてその所信を定めその所感を発表して、適当の行動を為さざるべからざるなり。」という積極的意気込みを以てはじまり、国家の行動と人民の思想が一致しないときは不幸だが、今回の戦争については、「余輩は些細(ささい)の疑念なく之を賛成し、聊(いささ)かも忌憚(きたん・遠慮)なく之の提言することは頗る痛快」であると、その国策支持の立場を鮮明にしている。以下要旨は、まず「正しき目的のために避くべからざる争闘は教祖も是認した給ふなり」として、キリストの言葉をひき、「基督の最後最大の目的は真正の平和を包含すること勿論のことなれども、時に是の如く説き給ふは畢竟(ひっきょう・つまるところ)正しき目的のために進行すべき途中において逃れがたき支障を除き、或ひはこれを防御せんが為に避くる能たわざるの争闘あるは現世界の状態なるを洞見し止むを得ずこれを是認し給ふなり」と説き、「戦争はその目的のその場合とにより是非すべき」ものであり、またキリスト教と国家国民の存立とは矛盾しないことを論証する。次にこの戦争の「目的果たして聖教の倫理に背反するところあらざるや」と問い、「征露の第一目的は日本帝国の存立を鞏固にせんがためなり」と政府の立場を擁護する。即ち、ロシアの野心と勢力拡張は日本の存立にとって危険であるから、この戦争は自衛戦争であり、やむを得ざる義戦(正義のために起こした戦)であるという。さらにこの戦争の目的は、「隣国友邦の安全とその進歩発達をはからんが為め)であって、「日本国の存立を欲し、日本人の進歩を祈る日本人が満韓の保全と進歩とを希望するは、国民としても個人としても、己の如く隣右を愛するの道に適合するものなり」と説いている。そして、この戦争に日本が勝つことは、一　韓国の事大家(清国と結ぶ政治家)をして国民の大小を知るべき真標準を知らしむることになる　二　清露の二大老国をして頑冥(がんめい・かたくなで事理に暗いこと)の夢を覚ましむる事になるであろうから、「日本勝利は支那国民の救拯(きゅうしょう)」であり、「露国を敗るは、露国を救ひ露国を救ふの要術也とすれば、振うて之を敗るはこれすなわち仁の道なることを知るべし」と結んでいる。

征露論の論理は、日清戦争のときのパンフレットとまったく同じであり、社会的混乱や政権動揺の著しいロシア、清国、満韓の支配者と政治体制を、近代化した文明国日本の鉄槌と指導によって変革することが、「先進国」日本の義務であり愛であるという論法であった。注　(初めは読み方・の下はその意味である)以下次号

クロパトキンの人形を飾り
遼陽の戦勝を祝う東京市民

笹森建英所長に贈る言葉

地域総合文化研究所運営委員　准教授　西東　克介

笹森建英所長が3月末で退職することになった。本学地域総合文化研究所の活性化を十年以上に渡り、周囲を巻き込みながら、自ら企画・行動・研究・編集を重ねて来た。彼が地域総合文化研究所の所長になってから、私は「協力者」、運営委員、主事として関わってきた。彼は弘前大学退職後、60代後半から本学社会福祉学部に勤めることになった。私がまず驚いたのは、所長のエネルギーである。年月が経つほどに、それを実感させられていく。

私が協力者のときには、研究所の研究発表者としてお誘いを頂いた。また彼が所長になってから、数年間は研究所の活動として年1回バスで巡見という史跡巡りをした。関係する研究者が、それぞれの史跡について解説をしてくださった。この企画や解説者については、事前に彼自身が動き、実施されたものである。鬼神社や神仏習合に縁ある寺や神社などを訪ね、地域の歴史の重要性を感じさせてくれた。

彼の活動の特徴は、津軽を強く意識するというより、それが彼の身体に埋め込まれていることだろう。彼は優れた作曲家（芸術家）であり、これを活かした民俗の研究も多い。津軽三味線、神楽、イタコなどの音声の記録・分析などである。

彼の作曲家・研究者・プロデューサーとしての高度な能力は、グローバルなものである。他方で、学問の対象や津軽を意識する持続的な能力については、ローカルなものといえよう。前者のグローバルな能力を基礎にして、後者のローカルな部分が分析される。ローカルな部分から出発しても、グローバルな世界との緊張関係が表れる。

このような彼の能力は、幼い頃から彼の家族との津軽・東京での生活、長年のアメリカ留学で育まれたのであろうか。ニューヨークでは、生活費を稼ぐために、アルバイトとして入ったレストランで、料理を担当するチーフにまでなったというから驚きである。ハワイでは、ネイティヴの舞が観光用にフラダンス化していくことに、強い違和感を持ったという。つまり、観光化されることで何百年も継承されてきたネイティヴの繋がりや霊媒が跡絶えていくことに危機感を持ったそうだ。このことは、所長として最後の講演になった3月8日の「近代津軽の民間信仰―イタコを中心として―」のテーマに表れていた。

最後の講演をする笹森教授

もう一つの彼の能力が、プロデューサーとしての総合性である。私たち大学教員に求められる能力は、研究と教育である。多くの大学教員は、専門分野の細かい部分を研究している。教育、とくに授業の多くは自分の専門分野を教えている。これよりも広い作業は、各教員が学科・学部・大学の中で分担して行う。この点、彼は総合的能力を発揮してくれた。

最初に述べた彼のアクティブな行動には、広報として地元のメディア周り等もある。私が運営委員になってからは、研究会や講演会が催される前には、必ずメディア周りや、ポスター作成を2人で行うことが多かった。彼による地域総合文化研究所の『地域学』の企画・編集（別巻も含む）は、11年間続けられた。『地域学』は、同様の他の研究兼雑誌が発行される以前から発行されている。もとより、青森県内の一般書店でも売られてきた。

3月7日　講演をする野口教授

彼は誰にでもとても穏やかに話しかけてくる。彼と私の年齢差による文化（慣習）の違いを考えると、まったく驚いてしまう。彼はタテの関係が当たり前であった時代に育ったにも関わらず、常に相手を大切にしながらヨコの関係で話を続ける。

以上のように、彼と長く接しられたことは、私にとって極めて貴重な歳月であった。このことは、本学の教職員にとっても同じであろう。

談話室

弘前の金魚すくい

社会福祉学部　准教授　北村　繁

印象として、弘前の宵宮の金魚は丈夫である。私の出身は関西方面だが、子供の頃に縁日の金魚すくいで捕ってきた金魚は、長くても3ヶ月、早ければその日のうちに死んでしまった。金魚すくいで追い回されている小さな魚のことなので、それが当たり前と、ずっと思っていた。だから、子供に金魚すくいをせがまれた時も「すぐ死んじゃうよ」と言って止めようとした。もちろん、小さな子供をそれで説得できるわけもなく、家に小さな和金を連れ帰るはめになったのだが…。

ところが、油断ならないもので、翌日あわてて買ってきた一番安い水槽セットの中で、その金魚は1年以上生きていた。横着な飼い主が、えさもやらず、掃除もしない水槽の中で、水槽にびっしり生えた藻を食べながら…。残念なことに、翌年の宵宮で子供が新たに捕ってきた金魚を水槽にいれたところ、仲が悪くて、2匹とも相次いで死んでしまった。けれど、さらにその翌年、再び子供が宵宮で捕ってきた金魚2匹は仲が良く、今度は2年以上生きていた。弘前には、金魚好きの人が多く、独自品種の金魚があったり、金魚ねぶたを飾ったりと、金魚にまつわる文化があることは知っていたが、まさか、金魚すくいの小さな和金までが、これほど頑丈とは思わなかった。

かくして、金魚飼育にすっかり慣れ親しんだ家族は、魚が家にいるのがあたりまえのようになってしまった。池や海で捕まえてきたザリガニやハゼも1年以上飼っていたし、現在でも、モツゴとメダカの水槽と池で拾ってきた金魚（誰が捨てたの?!）の水槽が玄関を占拠している。さらに2年前からは、家族でカクレクマノミ（もちろんこれはペットショップから買ってきた）を飼い始め、子供は水族館が大好きな中学生に成長した。そう思うと、我が家の生活や子供の教育にこれほど影響を与えたものは他に無いかもしれない。弘前の宵宮の金魚すくい文化を侮るなかれ、というところだろうか。

研究紹介㉒

こころの旅

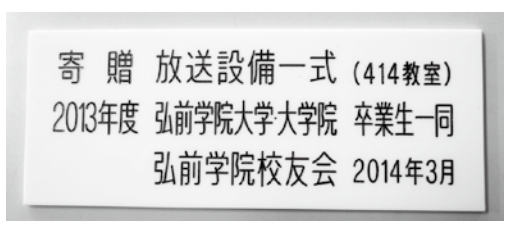
社会福祉学部　教授　齋藤　繁

現在は、「ある文豪の終焉」をテーマに取り組んでいます。これまで近・現代作家でる太宰治、三島由紀夫、芥川龍之介をとりあげ、さらに川端康成の生涯を構想中です。私の学びの遍歴は迂遠な道程を歩き続ける旅人のようなもので、うよ曲折がいちじるしく、正直言って何時までもゴールに至らない惧れがあります。端的に言いますと、一つは科学方法論上の問題「心理学は真に科学たり得るか」ということ。もう一つは「人間の認識とはなにか」ということです。無謀にも先史時代人の認知と非言語的コミュニケーション行動を知るための「心理（認知）考古学」「考古心理学」を考え、また歴史時代の人間行動の探究のための「歴史心理学」を構想していました。「知の考古学」なんかも好きなことばです。いずれも現代の心理学にとって、科学方法論的には容易に手が届かない「過去の人間」を研究対象とすることになるので早々に諦めて、やはり今までのように歴史文学に任せていた方が賢明なのかもしれません。件の文豪の終焉研究は、近代と現代の接点にある人間研究ということで、歴史心理学を形づくるための緒になりはしないかと秘かに考えているのです。

たぶん子供の頃は、父母がどのような思いで自分たちを育ててくれたのかを知ろうとしても、よく解りません。結局は親と同じ年齢になり、自分の子育ての共通体験を通して、はじめて、きっと親たちも今の自分と同じ思いをしていたんだなと得心がいくのかもしれません。過去に生きた人にかかわる追体験は、共通する認識を生みだすものだと思います。息子、娘の誕生と成長を見守る親にとって、それは自身の若いころの人生経験の再現と言え、ましてお孫さんの誕生は一層の輝きを増して、目に入れても痛くないほどに可愛さこの上ない存在として、祖父母の目には映ることになるでしょう。このような身近にある個人的ライフヒストリーのなかにも、歴史心理学の端緒があるように思われるのです。大学院生との研究テーマの中には、知的障がい者の知能病理、認知症の行動障害、記憶障害の病理と記憶リハビリテーション、実存精神分析療法、認知行動療法がどがあります。

弘前学院校友会より　母校援助金寄贈される

去る、２月27日（木）に、弘前学院校友会中田悦子会長より２０１３年度の母校援助金30万円が寄贈されました。この援助金は毎年寄贈され、今年は、本館４１４教室の放送設備購入資金の一部として使用されます。日頃の講義などで活用されます。卒業生の皆様方の熱い援助に心から感謝申し上げます。



社会福祉士・精神保健福祉士養成校成績優秀者表彰される

この度、二〇一三（平成二十五）年度の成績優秀者が決まり、三月二十日に表彰状の授与が学位記授与式後に行われた。

この賞は、学業成績・人物ともに優秀で、社会福祉士・精神保健福祉士養成校の養成課程修了者に対し贈られるものです。

日本社会福祉士養成校協会成績優秀表彰者は、向中野永さん、日本精神保健福祉士養成校協会成績優秀表彰者、工藤安裕美さんです。

片桐康雄教授の最終講義が行われました

看護学部　教授　三上　聖治

去る3月12日に看護学部片桐康雄教授の最終講義が本学礼拝堂で実施されました。看護学部初の試みでしたのでその概略について紹介します。

講義時間は13時30分から1時間と限られていましたので、学科長の司会で略歴紹介の後、早速最終講義に入りました。

演題は「視覚生理学史の中の私」ということで、45年間の片桐教授の研究生活の内容と紀元前からの歴史上の視覚生理学にかかわる人物と成果についてでした。また自身として北海道大学、慶應義塾大学、東京女子医科大学、弘前学院大学を研究拠点として、視覚系の電気生理学についてのテーマで研究を重ねたことやアメリカザリガニ、マダコ、コイ、シャコ、イソアワモチ、ホタテガイ、ホヤ、ヨーロッパモノアラガイを研究材料として使ったことの紹介がありました。

視覚生理学については、光受容細胞の光受容機構から中枢における視覚の認識までを研究する感覚生理学の1分野であることや感覚生理学を常にリードしてきた分野であることが紹介されました。この分野の研究は、生理学的研究手法以外にも心理物理学、組織学、生化学、免疫学、分子生物学的アプローチなど様々な手法が用いられていることの紹介から、先生の広い視野と柔軟さがうかがわれました。生理学史の紹介では、私たちが習ったプラトン、アリストテレス、ボイル、ホメオステーシスのクロード・ベルナール等の他に、不減衰伝導学説の加藤元一先生や慶應義塾大学への内地留学で出会った視細胞電位の富田恒男先生についても言及されました。

その後専門の研究について、脊椎動物錐体の光応答、錐体のスペクトル感度、色覚、光受容細胞の進化について触れ、いろいろな動物の眼について、時折ユーモアを交えながら膨大な研究内容を簡潔に紹介していただきました。

特に海産軟体動物腹足類のイソアワモチには、柄眼と背眼の二種類が存在することやホタテに上下合わせて60個以上の眼が存在すること、漁師の間では昼に産卵する昼ボヤと夜に産卵する夜ボヤがあると言われてきたが、光照射の実験で朝ボヤもあることの紹介もありました。

最後にこれまで関わった人々の紹介があり、出会いと支えによってやってくることができたことへの感謝で締めくくられました。

会場は、春休み期間中にもかかわらず、80名を超す聴講者で先生の人気ぶりがうかがわれました。（エリザベス・テーラーは…残念）

ソウル神学大学と姉妹校提携

学長　吉岡　利忠

昨年、11月7日秋の特別礼拝の講師延世大学趙載國教授の夫人である崔順育ソウル神学大学教授のとりはからいで今回の姉妹校提携が実ったものである。

ソウル神学大学は学生数約４０００人おり、神学科、社会福祉学科、幼児教育学科、音楽学科、英語学科、日本語学科、中国語学科があり、韓国における大規模高等教育機関の一つである。創立は１０３周年を迎え、１００周年にはその記念館が建てられ、教員、学生、大学院生および一般の人達を対象とする図書館および多くの教室が含まれ、また沢山の棟がキャンパス内に点在している。

本学は、二〇一三年度より正式に海外留学生を受け入れるため、海外の大学との姉妹校提携の準備作を進めてきた。

調印式は3月25日にソウル神学大学で行われ、本学からは、吉岡学長、楊尚眞教授・宗教主任が出席し、ソウル神学大学柳錫成総長、副学長および関係者によりおごそかに調印式が行われた。海外留学生を受け入れることによって、本学の教育環境が充実し、国際化へ新たな一歩を踏み出すことになる。

文学部 卒業論文・卒業レポート発表会

文学部では、2013年度卒業論文・卒業レポートの発表会を行いました。その内容は、以下の通りです。

英語・英米文学科　1月30日(木)

1．前田　彩花（佐藤(幸)ゼミ）
　The Thought of Thomas More's Utopia
2．佐々木　彩香（渡邉ゼミ）
　文学が社会を変える―“Lost Generation”が与えた影響
3．葛西　智恵美（佐々木ゼミ）
　おまじない
4．工藤　光平（川浪ゼミ）
　カズオ・イシグロ小説における音楽的要素
5．成田　和歌子（川浪ゼミ）
　ビアトリクス・ポターの生涯
　―ピーターラビットのふるさととは―
6．佐藤　亜衣（フォーサイスゼミ）
　L2 Education in Japan and US
7．川村　栄美子（吉永ゼミ）
　日本人英語学習者の英語名詞に対する可算性の判断について

日本語・日本文学科　2月1日(土) 13:30 ～ 16:00

Aグループ（日本語学系）401教室
川村　　歩　「気象現象を表す新語の研究」
中西　知美　「外国人児童生徒のための日本語教育と国語教育の連携」
太田　理絵　「現代日本人の命名に関する一考察」
北谷　靖恵　「災害とことば」
髙田　苑花　「若者言葉について」

Bグループ（古典文学系）410教室
齋藤　伊保　「杉浦日向子論」
工藤　桃子　「『好色一代男』に描かれた客と遊女の研究」
對馬彩有里　「『好色一代男』に描かれた遊女像の研究」
傳法　優樹　「『仁勢物語』研究」
藤田　善博　「井原西鶴論」
鳳至　香月　「近世の『牡丹灯記』翻案小説の研究」

Cグループ（古典文学・民俗学系）408教室
和田　翔子　「八代集の紫の世界―恋・立身・植物・地名・仏」
田村　裕実　「津軽地方の温泉伝承」
神　奈津美　「倭建命と大雀命に見る英雄像」

Dグループ（近現代文学系および他領域）411教室
境　　達仁　「釣りの歴史的変遷と文学の関係についての研究」
細谷地志保　「宮沢賢治三部作―『銀河鉄道の夜』、『グスコーブドリの伝記』、『風の又三郎』に関する考察」
越後　　駿　「夢について ― 100 日間の記録―」
村上　加奈　「商業施設と複合した公立図書館の可能性
　　―青森市民図書館を例にして―」
前田　紗希　「『ジョジョの奇妙な冒険』論」

2014
看護学部
学内就職セミナー
2014年 5月24日(土)
午後1時～ 4時
場所 弘前学院大学 体育館
いながらにして
病院・施設を知るチャンス!!

2013年度　理事長賞授与者

文学部　英　語・英米文学科　工藤　光平（弘前東高校卒）
日本語・日本文学科　境　達仁（東奥義塾高校卒）
社会福祉学部・社会福祉学科　佐藤　智美（岩手県立岩谷堂高校卒）
看護学部・看護学科　吉田さくら（岩手県立盛岡第二高校卒）

四年間を振り返って

文学部　英語・英米文学科卒　工藤　光平

大学生活四年間を振り返って思うことは、私は本当にいろんな人たちに支えられてきたんだということです。入学当初は右も左もわからず、緊張しながらリトリートに参加したことを覚えています。初めての英会話の授業では、ネイティブスピーカーの先生につたない英語で話しかけ、英文科に入ってよかったと感じたことを覚えています。個性豊かな先生方、クラスメートのみんななどなど、たくさんの人と交流を持つことができました。心折れそうになることも多々ありましたが、その度必ず誰かが手を差し伸べてくれました。私はどちらかといえばせっかちで、結果を急ぐ性格なので、時としてチームワークよりも自分中心になることがありました。しかし、本学に入学して一番身にしみたことは、仲間の大切さです。それは、クラスメートのみんなであり、先生方でもあります。何事も自分一人では達成できません。そのことに気づかせてくれたのが、仲間たちでした。授業の中でのプレゼンや発表でも、一人の力だけでは達成できないこともありました。みんなで知恵を出し合って、解決したこともあります。勉強だけでなく、学生生活においてもそれは同じで、人と人とのつながりが新たなつながりを生むんだということをひしひしと感じました。今まで自分は孤独だとか、一人きりだなどと思い込んでいましたが、この四年間を通して、自分は一人ではないんだ、と思いました。仲間とともに歩み、支え、また支えられながら、少しずつ成長できたのではないかと思います。これから先、不安もありますが、本学で学んだことを活かして、チームワークを大切にし、社会へと旅立っていきたいと思います。本学に入学できたことを、本当に感謝しています。

明日への坂道

文学部　日本語・日本文学科卒　境　達仁

ＦＬＯＷの『夕陽の坂道』という歌に次のような歌詞がある。「明日へと続く坂道錆びた車輪に跨り、ゆっくりと進む。時には壁にぶつかることもあるけれど登った時の喜びを覚えているからこそ車輪は回り出す」。この歌詞のように、今、卒業という四年間上り続けた坂道を登り終えることとなった。一人一人にそれぞれの学生生活があるのだから、登り終えた先にあるものもきっと同じであるはずがない。

弘前学院大学、日本語・日本文学科へ入学した当初、何も分からずおどおどしていた頃が懐かしい。初めて経験することというのは、興味・関心以上にやはり不安や心配が先立つ。

そんな不安に包まれながらも大学に入学したからには学生の本分である勉学に励もうと興味のある講義を出来る限り多く履修した。

講義は教授の個性ある授業と内容の面白さから興味の範囲が様々な分野に広がった。その分、レポートの提出やテストなどの量が増え、大変な部分もあったが、楽しい学生生活を満喫できたように感じる。

学年が進むごとに、より専門的な演習、教職実習や卒業論文、教員免許や就職に関わる講義が増え、より努力を重ねなければならなかった。しかしながら、その努力があったからこそ、内定を得ることができ、卒業論文を完成させることができた。

学院大に入学し、勉学に励んだこの四年間。素晴らしい先生方と出会い、良き友を得たことで、知らず知らずの内に社会へと踏み出してゆく覚悟を持てたような気がする。こんなことを言ってはいるものの、心の奥底では出来ればもうしばらく学生生活を過ごしたいものだとさえ、これから社会人として働く身でありながら考えてしまう。

卒業は一つの節目だ。しかし、まだ坂道は続く。これからは社会人として仕事という責務を負って生きていくのだ。そんな長い坂道を登り続けていくために、大学四年間という景色を忘れずにいたい。

祝卒業

四年間の出会いの中で

社会福祉学部　社会福祉卒　佐藤　智美

卒業した今、私の四年間の大学生活は周囲の方々に恵まれていた、と自信を持って言えます。入学当時は、福祉の道を目指しながらも見知らぬ土地、慣れない環境での生活に不安しかなかったことを今でも覚えています。その不安を解消してくれたのはこの大学で出会えた仲間であり、先生方であり、先生や職員の皆様でした。

大学生活では、毎日の講義や空き時間の仲間との談笑、先生方の研究室にお邪魔したり、社会福祉実習、精神保健福祉援助実習をしたりしました。その他にもヒロガク福祉創造フォーラムの活動、ボランティアや茶道のサークル活動、アルバイトを経験し、その度に出会った方々に刺激を受け、私自身の四年間の成長に繋がりました。もちろん仲間と笑い合った楽しいことばかりではなく、悩んで辛いこと、泣くほど悔しいこともありました。しかし、その経験があったからこそ気付かされることも多く、今改めて振り返ってみると良い思い出です。その中でも特に、福祉創造フォーラムの活動をしている時期が、濃厚で凝縮されていました。私はたった一度しか参加していないし、途中で諦めたので苦い思い出ではあります。しかしながら、フォーラムに参加したことで、関わることが出来た人々との出会い、講義以外での学びや発見が多くあり、一生懸命になれたもののひとつです。そして、この大学に入学したからこそ経験できました。

この四年間は、これからの生活の中で忘れることが出来ない、貴重な時間でした。頼もしい仲間もでき、変わらず付き合っていきたいです。この大学生活を支えてくれたすべての方々に感謝しています。そして、これからも私の支えになっていくと思います。大学生活での出会いや経験をもとに、今後の目標に向かって地道に、一歩ずつ進んでいきたいと思います。壁にぶつかることもあると思いますが、弘前に戻ったり、仲間と連絡を取り合ったりして気負わずにゆっくり乗り越えたいです。本当に四年間ありがとうございました。

四年間を振り返って

看護学部　看護学科卒　吉田さくら

私にとって弘前学院大学で過ごした四年間は、たくさんの人との出会いを通して成長することが出来た四年間でした。入学当初は、自分で選択した科目を自由な席で学ぶことが新鮮に感じられ、学ぶたびに自分の世界が広がりました。一方で、学ばなければならない看護の知識の多さに、何から学んでいけばよいのか不安になり、戸惑うこともありました。毎日の講義では、看護に関わる必要な知識を学ぶため、先生の言葉を必死にノートにとり、分からないところは先生方の助言をもとに、友人たちと協力し合って一つ一つ地道に学んでいきました。

また、三年次から本格的に始まった実習では、自分よりはるかに人生経験のある患者さんからの訴えや悩みに対して、出来ることの少なさや、どういった言葉をかけたらよいか悩む場面が何度もありました。そんな時、先生から「正解はないから、あなたらしい看護をすればいいのよ」という言葉をかけて頂きました。この言葉に励まされ、看護に正解はないからこそ、私がその患者さんに出来る精一杯の看護をすればいいんだと、前向きに患者さんと向き合うことが出来るようになりました。これから看護師として臨床にでる際も、自分なりに患者さんと向き合い、いつでも患者さんの気持ちに寄り添った看護をしていきたいと思います。

さらに、日々の勉学や実習はもちろんのこと、在学中に先生方から教えて頂いたこと、そして友人たちと一緒に笑い、時に悩み涙し、思いを語り合った中で得たことは、私にとってかけがえのない大切な宝物です。

私たちは、四月からまたそれぞれが新しい第一歩を踏み出します。新しい土地での生活や看護師という仕事の責任の重さを考えると、決して平坦な道ではないかもしれません。しかし、弘前学院大学で得た学びや出会いがこれからも私たちを支えてくれると思います。今まで学生生活を支えてくれた全ての方に感謝し、自分の目標に向かってしっかり歩んで行こうと思います。